

猿楽から子供歌舞伎へ

# 中世の伊吹山文化圏

京都市歴史資料館主幹  
山路興造



山路興造氏  
昭和14年東京生まれ、早稲田大学卒  
専攻は日本芸能史・民俗芸能学など  
主著に「翁の座一芸能民の中世一」  
がある。

最近、説話文学会が伊吹山南麓の春照で開かれるなど、かつての修験の山伊吹が再認識されつつある。今日でも新幹線の車窓から眺めるこの山の威容は、迫力がある。江戸時代以前、東海道が番場・醒ヶ井の宿を経て、不破関から垂井に出る時代に、近江平野を歩いてきた旅人は、前に立ちほだかる伊吹山の姿に神の存在を意識し、自然の迫力に身の引き締まる思いを抱いたに違いない。

わが国では、このような山は信仰の対象として崇められる。古くはその山麓に住む人々にとつての霊山であり、神の宿る山であるのだが、やがては山岳斗撒の修験者が行場として整備し、全国にその霊験を喧伝することになる。しかし伊吹山の場合は、すでに『古事記』や『日本書紀』に、日本武尊がこの山の神によって命を取られるという伝説が載るように、その威容は早くから中央に知られていたようである。

確かに一度でも東国へ旅し、この山の姿に接した者ならば、自ずと神の存在を確信したに違いない。そのためもあって、古代より朝廷の崇敬も厚く、富士山などとともに、日本七高山の一つに数えられたのである。

平安時代初期の『延喜式』には、この山の近江側に「伊夫伎神社」を記すが、『三代実録』元慶二年(八七八)二月十三日条によれば、この神社の別当寺でもあった護国寺の一精舎で、薬師念仏がおこなわれたとある。この頃の伊吹山は、薬師如来の居ます峰としての信仰がなされていたのであろう。この山自

体に葉草が自生しており、それらを使った修験者たちの霊験が、都にも喧伝された可能性もある。

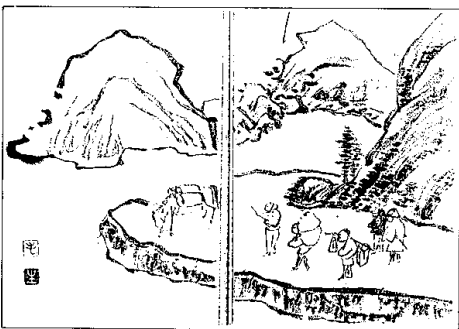
なお、『三代実録』の同日条には、この護国寺に国家寺院に準じた定額寺の寺格が与えられたことを記しているが、鎌倉時代初期になると、伊吹山護国寺は、観音護国寺・弥高護国寺・長尾護国寺・太平護国寺の四ヶ寺に分かれ、それぞれが多くの支院を抱え、寺観や勢力を競うまでに成長した。

もっとも信仰的には、伊夫伎神社を祀る伊吹山を修験道の教義に則って大乗峰と名付け、修行のために入峰した多くの山伏たちによって支えられており、彼らはあちこちに設けた行場を回峰したのである。

この琵琶湖北の伊吹山地を中心にした修験系の宗教文化圏は、琵琶湖南西の比叡山を中心とした比良山地宗教文化圏にも匹敵する勢力を持つものであったとさえ思われる。しかし都に近かった延暦寺が、朝廷や貴族の信仰を獲得して、政治的にも常にクローズアップされたのに対し、伊吹山の修験系寺院群の活動は、中央の文獻への登場が少なかったために、注目されぬままに今日に至っている。

なお、時代は少し下るが、南北朝時代から室町時代にかけて大乗山へ入峰した山伏たちが所属した寺は、現米原町域の松尾寺、近江町域の日光寺、長浜市域の布施寺・名越(超)寺、浅井町域の醍醐寺・大吉寺・大聖寺、びわ町域竹生島、木之本町域の鷺足寺、余呉町域の青山寺、多賀町域の敏満寺、甲良町域の

▼「伊吹山の伝説」に記される修験者



\*修験 山野において、霊験を得るための法を修すること。  
\*山岳斗撒の修験者 斗撒は頭陀(ずだ)の訳語。妻子を離れ父母を捨てて、諸方の霊山を渡り歩き、あらゆる執着を捨てて身心を修練する行人。

\*別当寺 仏事を修して神社に奉仕する寺で、神宮寺、神宮院、神護寺、神供寺、官寺とも言われた。神仏合体の風潮が固定化した近世に至ると、めばしい神社には寺院が付属され、寺社務に専念し役所としての性格をもった「別当」が広く置かれて別当寺と一般に称された。ほとんどは天台・真言宗寺院。

\*定額寺 七八三年以降、朝廷で一定数を限って定めた官寺。官額などを賜った。官寺待遇を出願したもの多かつたのと、田園を寄付して私利を営む私寺の濫造を防ぐために制定された。

\*修験道 役小角(えんのおづぬ)を祖と仰ぐ仏教の一派。日本固有の山岳信仰。護摩を焚き、呪文を誦し、祈禱を行い、難行・苦行をして神験を修得する教義。

\*修験道 修験道の修行を積む行者(山伏)

\*大乗興行 社寺・仏像の建立・修繕根本道場。峰入りをする山。

\*勸進興行 社寺・仏像の建立・修繕などのために、人に勧めて金品を募集するための興行。

西明寺、秦庄町域の金剛輪寺、愛東町域の百濟寺、湖東町域の大覚寺、蒲生町域の石塔寺、安土町域の観音止寺、近江八幡市域の長光寺・阿弥陀寺・長命寺・千手寺、能登川町域の安楽寺、五個荘町域の石馬寺などであり、琵琶湖東岸の全域が伊吹山修験の支配下に収められていたと言っても過言ではない。これらの山伏たちが伊吹山を信仰の道場とし、多くの信者を連れて入峰したのである。

もっともこの伊吹山信仰文化圏は、対岸の延暦寺文化圏と対立関係にあつたわけではない。同じ天台宗系の寺院として同列に置かれていたわけで、その意味では近江国全体が、比叡山の支配の下に置かれていたのである。ただし、同じ近江国にあって、比叡山文化圏より伊吹山文化圏の方が、確実に発展していったと思われる文化がある。社寺の祭礼や法会に参勤することを目的に養成されていた專業の芸能者が演じる「猿楽(申楽)」である。「猿楽」とは、わが国の代表的古典芸能として知られる能楽の前身のことであるが、近江ではそれが伊吹山文化圏に育成されていたよなのである。

現在の能楽は、中世期諸国に育つた猿楽者のうち、興福寺や春日大社、法隆寺や多武峰など多くの大社寺が存在した大和国の猿楽者である観阿弥・世阿弥という天才親子が、都に出て、室町將軍など文化人の庇護を得て確立したものであり、大和猿楽の系統であるが、当時は摂津にも、また丹波・近江・伊勢など

諸国に猿楽者が存在し、自国で活躍することにも、都へも上洛していたのである。

このうち近江の猿楽者について世阿弥はその著書である『申楽談義』に、

近江は敏満寺の座久しき座なり。山科は山科という所の倅侍なりしが、敏満寺が女と嫁して、申楽に志して、山科の明神(に)籠もりて進退を祈る。鳥社壇の上より物を落とす。見れば翁面にてまします。この上はとて申楽になる。

と記し、その子供のうち、嫡子を本家の山科(山階)に、次男を下坂に、三男を吉吉に置いたと書いている。この三座が近江の上三座として、室町時代には延暦寺の鎮守である日吉神社の神事に参勤しているというのである。ほかに近江には下三座があり、これは敏満寺・大森・酒人であるとも記す。

実はこの山科というのは、現長浜市山階町のことである。この地に近江猿楽山階座の根拠地があつたのである。次男が本拠とした下坂は、当然同じ長浜市の下坂で、現長浜市の地に猿楽座が建立されたということは、この地にそれだけの需要があつたということになる。

その需要先が、伊吹山の四大寺をはじめとする寺々であつたことはいうまでもない。現在観音寺が所蔵する徳治三年(一一三〇)の「伊福貴山弥高寺太平寺両寺衆僧和与状」という文書には、当時、伊福貴社(伊夫伎社)の祭礼に猿楽が演じられ、それを四大寺の衆僧が馬場に杖敷を掛けて見物したらしいことが記されているが、この猿楽が山階座の演じ

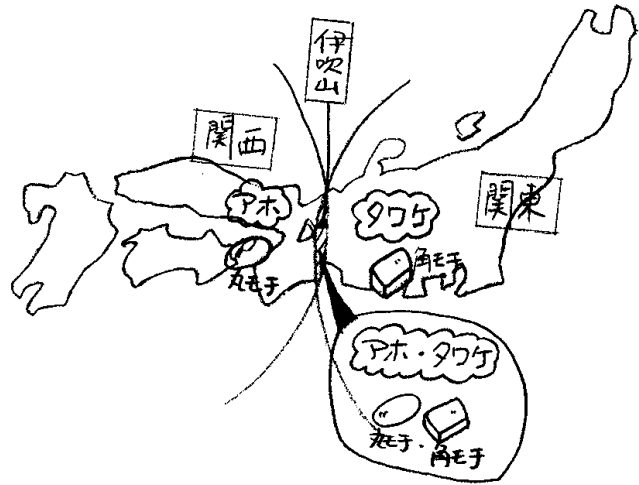
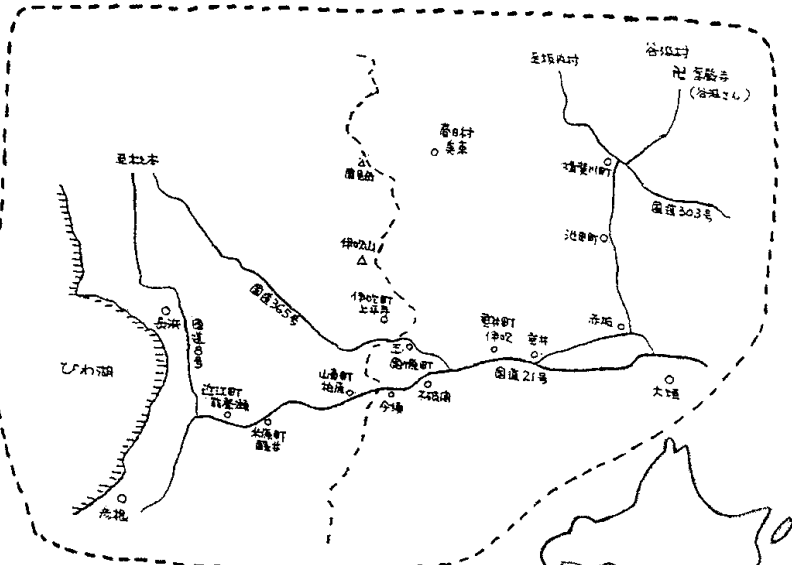
# 伊吹のお山は日本のお入り

谷汲道をたどって東と西の違いを探れば……

修験の山、信仰の山、歴史の山、薬草の山として古代からひらけた伊吹山は、日本列島のドまん中。人間の体に例えればおへその部分に位置する山。長い歴史の中で、日本人の食文化をはじめとする暮らしを隔てる山でした。

関東と関西の文化境界線は、愛知県豊橋市と新潟県糸魚川市を結ぶあたり（NHK）とも言われていますが、みいなスタッフが伊吹山麓を西国三十三番札所（結願寺）谷汲寺まで踏破し、沿線で多くの人に取材してみた。関東と関西の文化の違いは、伊吹山付近、という事実がいろいろ浮かび上がってきました。

巡礼の道、谷汲みちは、東と西の文化の回廊だったとも言えます。



第一班の車に乗り込んだのは、Y夫妻と子ども親子の計五名。「伊吹山の向こう側へ行くんやなあ」と、子どもたちは遠足気分。車は浅井町三田から始まる広域農道を東に向かって走り出した。

伊吹山のちょうど南の麓にある伊吹町上平寺で、畑を耕しておられた谷口守太郎さん（76歳）に声をかけてみた。

「昔はね、上平寺越えってあの山を越えて、岐阜県の春日村に行商に行ったと聞いてます。こちらからはお米や乾物を、向こうからは繭やお茶、こんにゃくなんかを背中に背負って運んだそうだけど、今はもう道も分からんようになってると思いますよ。上平寺は南向きだし、雪さえなかりゃほんとにいい所なんですよ。雪が降り始めるまでのあとわずかの時を惜しんで、どの畑もひざしをいっぱい吸収しようとしているようだった。

国道三六五号線の南にある岐阜県関ヶ原町

## みいな取材班・谷汲道を行く

### 「あほ」と「たわけ」の境は垂井あたり

玉地区は、上平寺から二キロほどの所。坂道を下りて行く、松口さよ子さん（66歳）が、「昔はよく長浜の御坊さんにお参りしたり、曳山祭りに出かけたりましたよ。ここからは江州と岐阜との境目で、昔、お雑煮は角もちだったけど、このころは角が立つって丸もちにしている家も多いようですね。ことばもごちゃになって、アホもタワケも使いますよ」とアカガヲを干しながら話してくださった。湖北とは婚姻関係も多く、買い物に行ったりもするという。

関ヶ原と垂井との中間に垂井町伊吹という集落がある。ここまできると言葉もしっかり岐阜らしくなる。

「『おおきに』も『あほ』も使わね。標準語に近い言葉を使うよ。隣の嫁さんが伊吹町から来てなさるから」と、松岡力男さん（61歳）が、隣の嫁さん、松岡鶴江さんと呼んでくださった。

「こっへ来た時は言葉がきつい感じがしたわ。『帰ってこい』という時、江州では『も

んできない』とか言うんだけど、『けて（けって）こい』って……。』とんでもない事」ができた時、ここでは「へえでもない事」って言うんですよ。「あほ」は「たわけ」だしね」お話している、なんとこの鶴江さんは、最初に会った谷口さんの奥さんの妹さんだと分かってビックリ！

さて急がないと集合時間に間に合わない。一路谷汲さんへと向かったのだが、道に迷い大遅刻。罰として帰りに春日村への取材を仰せつかった。美東という集落のお祭りをみることであったのだ。鮮やかな衣装をまとった少年たちの太鼓踊りは、湖北の雨乞い踊りとよく似ている。「歌詞の中にも江州のことが出てくるんだよ」と区長の竹内保さん（64歳）は、御神酒を勧めながら話してくださった。

御神酒をいただくながら私はメモを取る。Y氏は写真を撮るのに夢中だ。さあ、もう帰らないと日が暮れる。肝心の谷汲さんの話は後の班にお任せして、バトンタッチ。（蘭）



▲岐阜県春日村美東の太鼓踊り



「伊吹山がもつと敦賀の近く松口さよ子さん。亡くなったにあればなあ」と話す、谷口ご主人は四年がかりで鍾乳洞守太郎さん



を撮られたという



滋賀県の伊吹町から、岐阜県「この先の国見峠まで道がつ



の垂井町伊吹へ嫁いだ松岡鶴江さん。まだなんですよ」と春日村美東の駒月利己さん